

中村元 慈しみの心

山陰中央新報（総合）

中村元 慈しみの心 No.1626

無明はその他のもろもろの「煩惱が生じる」場（もと）である。他の煩惱は、眠ったり、弱まったり、中断したり、活動したりしている。
（『ヨーガストラ』）

△解説▽多くの煩惱はときには心にとどまっていたり、弱まったり、他の強い煩惱などに隠れ中断している。あるいは活動している状態である。しかし、どの場合にも無明（根源的無知）はともなっている。田地（生育させる大地）のようである。

服部育郎・中村元東方研究所専任研究員

2020.6.2 中村元記念館協力

中村元 慈しみの心 No.1625

全き悟りを開いた人が他人を教えさとすのは、人のためを思い、憐れむからである。修行完成者（如来）は順応と反論とから解脱している。
（釈迦）

△解説▽賛同する人には愛着が生じやすく、反対意見を述べる人には敵意が生じやすい。しかし、賛同と反論に執着すべきでない。問題はそこではなく、人を思い憐れむから教え諭すのである。この視点に立つと順応と反論はどちらもよいことになる。

服部育郎・中村元東方研究所専任研究員

2020.6.1 中村元記念館協力

中村元 慈しみの心 No.1628

嫌悪とは、苦しみ「を経験したこと」に従っておこる心情である。
（『ヨーガストラ』）

△解説▽嫌悪はかつて経験した苦しみがもたれている。過去にいやな思いをした、明確には覚えていないかもしれないが、それがもとで、心が捕らわれ縛られる。嫌悪し、反感をもち、怒りや害する気持が生み出される。自分に好ましくない対象に向かう不快感や反感である。

服部育郎・中村元東方研究所専任研究員

2020.6.4 中村元記念館協力

中村元 慈しみの心 No.1627

貪欲とは、快楽に囚われた心情である。
（『ヨーガストラ』）

△解説▽ここで貪欲とはこれまでに経験した快楽の記憶にもとづいて、快楽を得た過程に対して生じる「むさぼり求めるはたらき」である。快楽の経験を忘れることができず、つまり満足して完結せずに、何度も繰り返して求めてしまう。中毒的なはたらきだ。心は振り回され、結果、本来の自分を見ることができない。

服部育郎・中村元東方研究所専任研究員

2020.6.3 中村元記念館協力

中村元 慈しみの心

山陰中央新報（総合）

中村元 慈しみの心 No.1630

無常迅速生死事大と云ふなり。返返も此の道理を心にわすれずして、只今日今時ばかりと思ふて時光をうしなはず、学道に心をいれるべきなり。

（『正法眼蔵随聞記』）

△解説▽ものごとの移り変わりは迅速で、生死の問題は重大だ。くれぐれもこの道理を忘れずに、ただ今日このときのみと思つて、時を失うことなく学道に専念すべきだ。

服部育郎・中村元東方研究所専任研究員

2020.6.6 中村元記念館協力

中村元 慈しみの心 No.1629

色欲は火のごとく熾なれども、一念、病時に及ばば、便ち興は寒灰に似たり。

（『菜根譚』）

△解説▽色欲は燃えるように盛んであるが、病気になったときを少しでも思つたなら、たちまち興味もさめて、冷え切つた灰（寒灰）のようである。病や死を自覚し、いま生きていることを実感し、生を充実させ、道を求める気持ちを育てるべきだ。

服部育郎・中村元東方研究所専任研究員

2020.6.5 中村元記念館協力

中村元 慈しみの心 No.1632

当世といふことは、今に限らず、三〇年前は今の昔なり。今の昔は三〇年前の当世なり。

（沢庵）

△解説▽今の世の中（当世）といふのは、今に限つたことではない。今を基準に考えれば、30年前は昔ではあるが、30年前のそのときは、やはり当世といふことだ。「昔は良かった」「今の若い人は」というが、昔から同じように言われていた。当たり前だが、今しか行動はできない。

服部育郎・中村元東方研究所専任研究員

2020.6.8 中村元記念館協力

中村元 慈しみの心 No.1631

人間は、思想なしには、生きていくことはできない。思想などいらないものだということ自体、また一つの思想である。

（中村元）

△解説▽失敗や挫折もある旅路、紆余曲折あるその人生において、どのように生きていけばよいのか。根本的にたよりになるのは自分であるが、自分の行動を統一して、最終的に判断を下し、めげずに進んで行くには、やはり思想的根拠があれば強い。

服部育郎・中村元東方研究所専任研究員

2020.6.7 中村元記念館協力

中村元 慈しみの心

山陰中央新報（総合）

中村元 慈しみの心 No.1634

人の心は水の器に従うがごとし。器方なれば則ち方なり、器円ければ則ち円し。

（『観心略要集』）

△解説▽人の心は水が入れ物の形に合わせて変化するようなものだ。四角ならば四角、円ければ円に。条件によって影響を受ける。ゆえに、正しいよりどころ、よき指導者につくべきで、それによって自らのこころをよい形にすることができる。

服部育郎・中村元東方研究所専任研究員

2020.6.10 中村元記念館協力

中村元 慈しみの心 No.1633

何が故に、刹那の苦果に於いて、なお堪え難きことを厭い、永劫の苦因に於いては、自ら恣に作らんことを欣つや。

（源信）

△解説▽目先の一時の苦しみにあわててこれを避けようとするのに、これからの長い時間の流れにおいて、苦しみになるだろう原因については気づかない。そして、気づかずに自分のほしいままに行動してしまふのはなぜだろうか。

服部育郎・中村元東方研究所専任研究員

2020.6.9 中村元記念館協力

中村元 慈しみの心 No.1636

私も他人も、危険と苦しみを好まないのに、私にいかなる優越性があつて、自分だけを護り、他人を護らないのであるか。

（『入菩提行論』）

△解説▽まず自分の身を護るのは当然であるが、他の人を護らない、無関心というのでは正しい道ではない。危険と苦しみにおいて自分に優越性はない。他人の苦しみが自分の苦しみでもあると教えている。

服部育郎・中村元東方研究所専任研究員

2020.6.12 中村元記念館協力

中村元 慈しみの心 No.1635

あなたたちは風説に「惑わされては」いけません。

（釈迦）

△解説▽ここでは、実践修行における注意を説いている。たとえば、素晴らしい伝承だからとか、すぐれた聖典だからとか、中身ではなく評判だけで決定してはいけない。また、ある師匠は堪能そうにみえるといった様子だけで評価しても過ちが生じる。デマやうわさなど、これはすべてに関していえることだろう。

服部育郎・中村元東方研究所専任研究員

2020.6.11 中村元記念館協力

中村元 慈しみの心

山陰中央新報（総合）

中村元 慈しみの心 No.1638

世の人々は死によって圧迫され、老いの矢に囲まれ、愛欲の矢に刺され、つねに欲望によって燻べられている。（釈迦）

△解説▽この世は思いどおりにならない。それを「苦しみ」と仏教では定義する。老いて死し、愛欲や欲望に振り回されまわりが見えなくなる。その苦しみをありのままに知ることが出発点である。現状把握なくしては方向も定まらず、正しい道も見いだせない。

服部育郎・中村元東方研究所専任研究員

2020.6.14 中村元記念館協力

中村元 慈しみの心 No.1637

現在の状況をそれぞれによく観察し、明らかに見よ。今なすべきことを努力してなせ。（釈迦）

△解説▽過去を反省し、未来を願うこと、それ自体は間違いではなく必要なことだろう。ただ、活動できるのは、過去と未来のつながりのなかにある「今」しかない。だからこそ、その現状を明らかに見よという。すると、おのずからなすべきことは明らかになってくるのではないだろうか。

服部育郎・中村元東方研究所専任研究員

2020.6.13 中村元記念館協力

中村元 慈しみの心 No.1640

我を生む者は父母、我を成す者は朋友。（百丈懐海）

△解説▽私は父母から生まれたのであるが、道を進むにおいては朋友の力は何より大きい。実践修行では、よき師匠に巡り会うのは重要であるが、それより同じ目的に向かって励まし合ったり、認め合ったりする仲間との存在は何より大切。よき仲間がいると、苦難にも耐え、道を進む力を与え合うことになる。

服部育郎・中村元東方研究所専任研究員

2020.6.17 中村元記念館協力

中村元 慈しみの心 No.1639

貪りと怒りと迷妄とが、己に生じると、悪心ある人を害する。茎の細い植物に実が生じると「害されて倒れる」ようなものである。（釈迦）

△解説▽煩わし悩ます心が生じてはたらきだすと、燃える火のようにますます大きくなる。そして自ら生じたものによって自らを燃やし害してしまふ。あたかも、細い茎の植物が大きな実をつけて自ら倒れるようなものだ。

服部育郎・中村元東方研究所専任研究員

2020.6.16 中村元記念館協力